

えてやってください。」  
 久子「久子でございます。何もかも一から教えていただきたいと思えます。どうかよろしくお願いいたします。」  
 お母さん「私は、与右衛門の母でございます。一日も早く、この小川村の暮らしに慣れてくださいね。」  
 久子「はい、わかりました。」



う。着替えをなされたら、ゆっくりお休みください。」  
 久子夫人は、花嫁衣装をぬいで化粧を落としました。そして、ようやくほっとしました。ところが、久子夫人の素顔を見たお母さんは、ぶ

⑥ 次の日、先生と久子さんの祝言（結婚式）が行われました。小川村の人も残らずお祝いに来ました。お母さん「与右衛門、久子さん。皆さんに祝っていただき、幸せでしたね。」

与右衛門「ありがたいことでした。お母さんもお疲れになられたことではないです。」

つぶつとひとりごとを言いました。  
 お母さん「まあ、お化粧を落とした久子さんは、きれいな人とは言えないわね。私は、とても楽しみに待っていたのに、残念だわ。いっしょに歩くのもはずかしい。」

⑦ 久子夫人は、数え年十七歳という若さでしたが、心のやさしい落ちついた人でした。先生は三十歳で、門人たちに学問を教えるかたわら、酒を売ったり、お米やお金を貸したりしていたので、大変な忙しさでした。

義助「先生、朝早くからすみません。米を二升（約3kg）貸してください。」

与右衛門「はい、わかりました。急なお客さんですか。」

義助「親せきで法事がありますのでな。」

与右衛門「そうですか。すぐに用意しますよ。」

久子夫人は、先生を助けて家族や門人たちの世話、畑仕事などに、一生懸命働きました。

お母さん「久子さん、いつまでも畑仕事をしないで、早く朝ご飯の用意をしなさい。もうすぐ、与右衛門の講義が始まりますよ。」

久子「はい、わかりました。すぐ、台所に入ります。」

与右衛門「久子、忙しそうだな。す



きます。」

まんがどびんに茶を入れて持って来ておくれ。」  
 久子「はい、すぐに持っていきます。」

⑧ そのころ、先生の学問は、ぐんぐん進みました。門人たちには、毎晩、熱心に学問を教えました。夜明けの四時ごろまで続ける日もありました。

与右衛門「久子、今晚の講義は、遅くなりそうだ。先に休みなさい。」

久子「私にも、講義を聞かせてください。尊い生き方や人への接し方がよく分かり、私のためになりますから。」

与右衛門「そうかな。しかし、昼間はゆっくりできないと思うので、夜は早く寝たほうが良いぞ。」

久子「門人の皆さんが、生き生きと学んでおられるのを見ながら、お世話ができるのは、私の楽しみでもあるのです。だから、気にしないでくださいね。」

久子夫人は、与右衛門さんのそば



に座り、講義の内容を学びながら、あんどんの油が切れそうになると、足したり、あたたかいお茶を出したりして、門人たちの世話をしました。このような暮らしをして、一年が過ぎました。

⑨ ある日、お母さんは、与右衛門さんの所へそつとやって来ました。

お母さん「与右衛門、入ってよろしいですか。」

与右衛門「はい、お母さん、何でしょうか。」

お母さん「久子さんはよく働いてくれますが、一つだけ気になることがあります。」

与右衛門「久子が、具合の悪いことをしたのですか。」

お母さん「与右衛門、言いにくいのですが、久子さんの顔立ちが良くないので、今のうちに別れてはどうかと、思っています。」

与右衛門「えっ、お母さん。何ということを……。」